

授業研究会記録

文部省中等教育局教科調査官 徳島県中教研道徳部会研究委員長	横山 利弘 先生
小松島市立江中学校長	大川 雄哉 先生
特別公開授業 板野中学校教諭	森口 健司 先生
富田中学校	豊永 千鶴 先生
司会者 美馬郡木屋平中学校長	竹内 孝佳 先生

1 授業者反省

時間を超過し、申しわけない。今日の授業のように、普通の授業もどのように流れるか全くわからない状態での授業である。6月25日研究授業を経験し、固い絆で結ばれていく正味の授業となってきた。週一時間の道徳の授業は、私自身とても楽しみにしている。人間対人間、人間としてのあり方、生き方をぶつけあい、人間としての喜びを実感できる時間である。今まで出逢った生徒たちがくれた言葉を支えに、今の生徒に思いをぶつける。そしてまた、今の生徒たちが思いを返してくれる。本年11月19日の徳島県中学校同和教育研究大会においても、今日のような本当の思いが出しあえることを生徒たちは喜びとし、励みにしている。今の生徒とは中2、中3とかかわってきたが、最初はほとんど発言をしない生徒だった。くり返しくり返し思いを語りあう中で、本当の思い、熱いもの、ああがんばらねばという思いがこみあげてきて、ありのままの姿をぶつけあうことができるようになった。3年B組の生徒たちに出逢ったことに感謝と尊敬の気持ちをもっている。そんな思いの中で、明日からの実践にがんばっていきたい。



2 質疑応答

○奈良県橿原市 森脇先生

研究会等に参加すると道徳の授業の中ではいいことを言っているのに実際には、あいさつができない、ゴミが落ちているのに平気など行動がともなわないという場面に出くわすことがある。その辺はどうなっているのか。また、そのギャップをうめるために、どのような努力をしていけばいいのか討議していただきたい。

○司会者

道徳の授業と毎日の行動についての差についてどう考えるか。

○森口先生

道徳の授業の中での発言と行動のずれがないよう、おさえつけてさせるのではなく、授業を通して心を育てていくことが、道徳の時間のありようでないかと思う。

○森脇先生

人権問題を語りながらも、タバコのゴミなどを平気であちこち捨てる教師もいる、きつい言葉で黙らせていることもある。本当の道徳教育であればよいことは勿論であるが、本当の道徳とは言葉と行動が一致しなければいけないのではと思う。その点で道徳の授業にいつも疑問を感じている。

○大川先生

確かに学校現場において知と実践のずれはある。道徳教育全般について考えてみた場合、道徳の時間と実践との間にずれは当然あるものだと思う。そのずれを埋めていくべきものの中に特活があるのではと思う。また、そのずれをなくすには、学校全体で行われている道徳教育が充実されていくことと、もう一方で道徳的実践が徹底して行われていくことでないだろうか。

○東京太田区立羽田中学校 菅先生

森口先生に質問。2年生の時にはあまり意見交換ができてなかったそうだが、今日の授業は非常に意見交換が活発に行われていた。あのように活発になるまでどのようなことをされたのか教えてほしい。

○森口先生

昨年から2年生185名と担任5人で道徳を充実させ語り合い、話しあえる授業を作ろうと、とりくんできた。2時間ひと続きの時間をとり、1時間は1つのクラスが体育館で授業を行い、あとの4クラスがそれをそれを囲んで見る。そして次の1時間は全体で話し合うという形の授業を行ってきた。その中で、1回めより2回め、3回、4回と進めていくうちに深い話し合いができるようになってきた。そして本年もそれを継続して行った。その中で、いろいろな形での話し合いができるように高まってきた。生徒たちは自分が出せる喜びを見だし舞台が大きければ大きい程よりがんばっていける部分もでてきた。このように生徒たちが変わってきたのは、学年として、学校として取り組んできたことが一番の大きな要因であろうと思う。

○鳴門一中 日下先生

授業を通して、ひとつの絆（それぞれ結び方は違うけれど、その結び目）を大切に育てていこうということを心がけているが、道徳の中で人間関係を深めていくには、どうすればよいか。道徳の授業の中で実践力を深めていくにはどういう手だてを考えていけばよいかについて教えてほしい。

○司会者

実践力をつけるにはどうすればよいか。授業の中で人間関係を深めるにはどうすればよいか、授業のあり方についてのご指導をお願いしたい。

3 指導助言 横山先生より

（自己紹介、挨拶略）

一つは知と行のずれの問題、もう一つは道徳の時間で実践力を深めるにはどうしたらいいかということについて、できるだけコンパクトに理解いただけるようにお話をさせていただきたい。

まず、知と行のずれというのは、子どもたちの道徳の時間と道徳的実践の中にずれがあるのではないかという指摘以前に、われわれ人間が等しく悩みともっているものである。私たちは、知と行

のずれを、私たち自身の事としてとらえるべきである。道徳の時間の指導と日頃の学校経営あるいは、学校経営との間のずれはどうか考えてみる必要がある。

道徳教育は、教育活動全体で行われるものである。学校における教育活動全体ということは各教科においても、特活においても、勿論道徳の授業においても、道徳的実践の指導をどうしていくかということである。

例えば、数学の時間に一生懸命に取り組んでいる子がいるとする。その子にがんばること、一生懸命に取り組むことに値打ちがあることだということをその場で言ったとして、それを道徳の時間には、なぜ、できなくても一生懸命がんばることに意味があるのかを考えさせていく。それがまさに補充であり深化である。日常の教育活動と離れたところで何か特別なことをやるのが道徳のやるべきことなんだという受けとめ方をするよりも、毎日の生活の中で子どもたちが様々に示している生きている時の姿をきちんと、とらえていくことが大切である。そして、現実の道徳的行為を毎日できるように励ますことと、その行為がなぜ意味があるのか、なぜ人生にとって大切なのかを道徳の時間に考えさせてほしい。

次に、道徳教育でいう「心」とは、道徳的な心情、判断力ということをさしているが、子どもの道徳的な判断の基準を教師がきちんとつかむ必要がある。どういう判断基準で子どもが動いているのか、道徳教育の根本は、教師が子どもの心を理解することである。そして、今このような段階であるが、次のステップへはどうしたらあがるかということを考えて、資料を用意したり、道徳の授業の展開を考えてほしい。子どもの心や発達段階を、本当に日々の生活の中で共感的に理解してほしい。そうしないと、道徳教育は、いくらやっても始まらない。

知と行のずれをなくすには、子どもの心を見ること。学校経営、学校生活の中で教師自身が知と行の不一致をおこさないことが大切である。道徳教育に真剣になるということは、学校が本来の教育機関になるということである。

もう一つの問題、道徳の授業で実践力をどう深めるかについては、道徳の時間に子どもの発達の段階をしっかりと理解したうえで、今の状態よりもより高い価値に気付かせていくことが必要である。道徳の授業において、子どもは自分の認識の中で発言しているが、より高い価値に気付くとは、この枠の中では解決しないものにつかって、ああなるほどとわかった時にこそより高い価値に気付いたということである。授業においてより高い価値に気付く。それを自覚させていくということが、実践力を高めることである。そのためにも、資料にたよるのではなくまず子どもの心の発達段階をつかむことが基本である。